

風 錄

柳多留 二十九編

9  
1147  
28



門へ 9特  
番 1147  
巻 28

# 送叙



連 然り 吉武 何り 能く 支をり  
 おく 一連の 首尾 三句の あり 付  
 て 小この あり 道に じりし  
 今 此お 句の 一孝 同 差あつ  
 孝 貞 忠 誠 子 かん じり 此 此  
 毎 子 六 冊 子 子 向 かく 獨り  
 心を 催し 兼て 兼て 兼て 兼て

吉良陵朝のねー若のたまひを  
思ひかゝるゝ高年舎 芙蓉表  
廿九等申の口子口子似  
たゞ世に雅君子に口のたまひを  
つめられん子をとおそに

寛政十二年 月見月

露霜一印く月宮殿の華三交  
兼凱ハ鶴を高尾海をまに伝成  
細布河川北海園を向るゝ未学  
筆書いささか控ゝかお(付)無水  
筆書いささか控ゝかお(付)無水  
室河とある所い余依のりし 石解  
楊年傍何代遠の此。ゝ川智  
難は神ら同じ切也不流隨是 雨る  
中太刀し御鳥はりの後(云) 交烟

唐人の風と李は去事より雨を  
問ふ所れが揚枝を道に懸けし力に  
影ももみれば眼もさるる影も  
凡の葉のまき屋のまき屋の柳雨  
おとんの夢切跡かき次交洞  
かみ紙をん牛の園に毛盤を  
二人の一人の寝る情もあらず  
後河原のまき屋のまき屋の  
白のまき屋のまき屋の雨を

兼のまき屋のまき屋の雨を  
山原のまき屋のまき屋の雨を  
湯原のまき屋のまき屋の雨を  
おとんのまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を  
まき屋のまき屋のまき屋の雨を

終りの所あるに到りては此處費全  
し事終るをきてあるべきの首九段  
西の邊より國にゆく所を  
所は梅より替りいふやのあまう梅  
可なりとてあまうといふ所  
湯屋の押押しある村は師  
此はくの外に三段は属し  
口は路の辺の山に  
方少んき者おぬん  
有景



ゆびでくしてあまの比治村は九段  
多層多りの男のあられ髪行二  
雨れも物入れいふ所の  
帯はけしあまの比治の  
押屋下をよま合はる  
子にきく六轉くと  
いらいの六位の  
逐あま白ぬ  
千載子日陰の様一  
カテウ



内難録の如く梅まじり申す  
神宮の産の通俗地を更くす 産録  
濁りてのうら目と云ふは子孫を  
名匂ふはなることあり梅樹拾ひ 石碑  
九月候あじふ十日さうり 雨夕  
松いつれないう梅いつ道うあり 神宮  
呉後唐一日花くまのを云い 〃〃  
淡江を並に河内省を抄り 三交  
水の國と云ふは浪を島子に石碑

延喜の代梅の首人毛虫老し 雨夕  
水三人りの梅木庭の首百人首 三交  
木陰川の月とてお梅の神より奉 春約  
月を云ひて梅と云ふは梅と云ふ 雨夕  
十三の葉とて七の葉は梅し 孤雲  
雨夕のうら目と云ふは梅と云ふ 錦鳥  
梅樹の首人のうら目 胃行 竹二  
夕鳥の首人山梅のお梅と云ふ 雨譚  
梅の紙書と云ふは梅のれと云ふ 鬼文

外中ハ花折て実果ハ如常定 可憐  
紅葉ハ植つて社なる柳 雨冬  
橋中ハ雨の他人ハ昔 白志  
非業の死ても凶年の上程後 雨冬  
道行ハ雨の雨の雨の雨 雨夕  
意なきハお身は枯れぬ子 衆水  
きめ示れきめても雨ハ静ん 松空  
只ハ雨の雨の雨の雨 松空  
下解て雨の雨の雨の雨 松空

根方ハ雨の雨の雨の雨 東冬  
かひて雨の雨の雨の雨 交個  
冬風の冠の雨の雨の雨 衆水  
雨冬ハ雨の雨の雨の雨 雨冬  
把栗ハ雨の雨の雨の雨 把栗  
修成ハ雨の雨の雨の雨 修成  
表靴ハ雨の雨の雨の雨 表靴  
春約ハ雨の雨の雨の雨 春約  
雨夕ハ雨の雨の雨の雨 雨夕

持系路鼻があらけりかひる昔の  
えらひりかたんと其の  
清き子似ては中世のあり  
か房の穂科をみよむる  
口へおへ割えんくねらぬなり  
けいせいのたてしよく後  
好の丹道の流しとけしあり  
言ひおねまを如む様あり  
毒の目とくおまえんまの  
文集

言ふ一つ首禪ると二位の  
むさしふほんやうの  
西十年後子の國尊は龍一  
時りくは打つては長解  
市形とまのまの  
法中の陽の和尙の継の  
難解のよとられ古用世の  
あきかい昌年おまの  
刻はふはまの



お月さあはくすくみはきこしむし	雨夕
いしあひ形りくすくすくす	矢正
雪月は初うすはのあつ固の月	カテウ
白き子の側て又昔は姫の字	川鳥
運のこそ俵よあ男はえをくれ	柳雨
涙持てあかんの巾着は送るえ	海鳥
朱て伝る石はけこたまは人たり	雨澤
名車の中へ並てく藤より	藤籠
名の上はしり別れはるる着るも川	笹石
をさあらしをさう物倉の上をへ	雨澤
根におきこておきる衣久	竹二
柄のまはけけ初めはるる	雲鳥
人間よあふはるる衣は並木	雨夕
辻番の百のうはあ守は馬	束也
杜木はの燭を夜中も白	カテウ
張るの形りく白玉をさるる	雨夕
おのをさげさるる	カテウ
女房の我意はあはるる	雨澤

見料よちよと西瓜はきりえ	雨澤
あゝ方ても折減のけくきりえ	善行
露の露りふふふ露りし物え	物智
記もかけはよるは物え言人え	字物
俾よ山岡をいれは是を長白	雨澤
汁もいれまゝをいれ人え	懸谷
石二山よまろつ雪の傳是也	晋風
八景をとりゆりあゝ二井の種	字梅
三味せんはきんじふふま地え	實例
再い由意あめるそちらるる	羊流
ふふ者つても山吹おは解やい	可候
出首尾く下りては娘の自ぬけ	把兼
下是ははる和留の系娘がもこ	曙山
いよりてふ起し者下りあやう	字物
かたしう男はまろつては仲の雨	雨夕
近くいおと目ても足らるる	山
あゝりは物しるる分る事あり	雨夕
たを盆うらぬく例ははるる事	字物

<p>         稲妻あはれをそへたり向く仲の所          ねこりく仲間安んずる          だらうの成りに袖とぬい藤原有          火将うら若幽界におりうら          大口台孫之庄          月しりせり娘焼坊          ほりちのよあふ月はさきおて下か          貝流ハ生後の子さき油          月あへんはさき油          芝居やうとこと母をたえ          ちりちりさ思ひ人首は乳母足          まりこのせんさき油          ありあへんさき油          草あはれさき油          鰯と流るつてさき油          ほり殿はあつてさき油          心もさき油          かたし田方の上さき油       </p>	<p>         杉宮          東寺          盤谷          川寺          耳梨          盤谷          凡診          盤谷          春約          結衣          丸診          蘇崎          志衣          全          二交          雨澤          寛例          廿五       </p>
---	--

をん昌す春はさくらもさくらも  
矢正

夕之よふゆふゆふとて人の心とて  
富梅

沖のかのめでたき物ありあそび  
雨夕

またくか男女のあそびあそび  
逢春

しめゆきよめが追剥がすといふ  
三交

かぬのこころはなごころとておもしろ  
富梅

はるの瑞雲宵の雛のたうは  
可い

ととら孔とて雨川（流るりり  
富梅

水はあつと有るはるのこころ  
雨澤

おのやぐが海とてきゆうとて  
柏之

生輝た家づとてまよる花のそら  
可い

すくまおひしりうらま子のひろ  
富梅

いひし事あそびの終る夏の帯  
柗雨

ほつとておるはるの梅え  
スノ

玉の直に應がきかまの向はり  
雨澤

も延きあそびの心とて  
夕

おどあそびの秋の圓よりあそび  
昔凡

またくかあそびの夜のせい  
東冬

毛西鶴いお出うゆ一 終のそり 鬼文  
おん志きも春も影すく唐女 力子  
牛も石い大七力ふ武女山倉 寛叔  
俄雨上戸うけ出志る影ゆら 柏之  
大筋の活は通る 風車 奈休  
おとらうささ女おけく首て柳 張小  
罷よ成る種影は拍する 禮治 富松  
約船の葉版寺ふ事法よ積 登谷  
そり影のゆて陰いぬ女弟之 志乃

四十九て拍くそり由い大ふい 登谷  
引編てち内比おるらんごあろ 際雅  
庵丁てち子の間地比打てを 以六ノ  
新酒と上りすと通ひ比を春 川智  
下女ちろり白をて出で何者 佛山  
やさりらて下女新酒の面も馬也 雨夕  
志つるふ夜文地ふよ法い張る 鳥梅  
ぬくくくしきくふ影これぬ神事之 寛例  
箱の水鴨ふ小命をらん等しき 珍鳥

かすくふ月いばらむいんじ	多梅
かきんごまて行のこの皮花むき	ツハメ
神植の梅も申し我道い	雨夕
下曲梅秋あぬと目ふまうそ	花小
下箱の至ても如きて入れぬ雨	川鳥
香の夕名たきらふ命を後しき	字物
こい鼻恒くあわもこさしん坊	全
梅の枝くいあざこのさし身え	柳雨
母くら川身を初路すらるる	雨夕
件玉くる枝も花物るまされ	大花
石墨量いさる近のけすち社	字物
あわねあまの路交森けつん	漫川
人すのあまのハ靴の文入衣	雨澤
空箱天もさし之角か雪う海う	柳雨
考るきつたひくらゆせとあま	雨夕
明のさしん今日休あり	全
川々互の廊下羊の急はのよふ	ヤナキ
ゆりさく流せれたよむら	花丈

から葉の年ぬ玉て梅の影 矢正  
あまのけしと修屋の影たやまど スノ  
くろく貴あはたふ余りのやま 高梅  
あまのけしと修屋の影たやまど 雨降  
鬼の影よりあまのけしと修屋の影 氷  
梅えの影別梅えの影 かつら  
くろくくもあまのけしと修屋の影 矢正  
田女の影くろくくもあまのけしと修屋の影 玉手  
湯屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 かつら

梅葉の影くろくくもあまのけしと修屋の影 湯屋  
あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 矢正  
梅の影あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 門板  
かんざり天あを梅屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 玉手  
松の影あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 川  
遠縁の影あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 西ノ  
あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 芥太  
あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 柳雨  
あまのけしと修屋の影くろくくもあまのけしと修屋の影 門柳

湯殿より身を祈りて折る杭の枝 柳雨  
赤三日月をまじりてまねて是猶たり 雨夕  
山の神巻子を投る身見す事 玉蓋  
舟日のおしほしほとよりも折れ 竹二  
船年よりまじりて入るてしよりのま 矢正  
こやこしーやがほのま紙が二とを 全  
奥倉のおしほしほが下々をなすり 穂并  
中代のまね神を皆に折るなり 力なり  
柳法をいふ如の舟よりまじりてま 在事

且又八地下人のまじりて海を 柳雨  
あのまじりて舟より折る山八折 矢正  
下中まじりて折るまじりて折るやと 川を  
折るまじりて橋の下々へ西ま 綿を  
まの江に折りて水直枝りてま 有草  
まじりてまじりてまじりてま 玉蓋  
まの日のまじりてまじりてま 舟矢  
二ヶ國のまじりてまじりてま 名系  
十返りまじりてまじりてま 柳雨



叔母の仲子代に不着をばらむは 前記  
まのよきあはれし役者の女御 柳雨  
十ッ指のゆひたれぬしむすあ 露影  
てしちんの執事あはひよきあは 海鳥  
かつちんあはれしよきあはの乾 門柳  
一ッけ婦の門に署 加藤新 并文  
お下しあはれ日傘の雲長ふりま 力三郎  
務とすり奴子も成るも孝の道 〃  
開運をすの乾めたにさあは 并文

道をたすぬぞる考に在位なり 玉喜  
貞しいあはれあはれ人の命なり 文基  
二人藤の故あはれあはれつくり 泉南  
志人道くまれく成る道なり 美仁  
いさつちあはれしあはれ中流し 柳雨  
他あはれしあはれしあはれ入道 玉喜  
百にあはれしあはれしあはれ入道 三交  
あはれく大工造あはれしあはれし 姫小  
十月八がまいをかきく大あはれ 鹿乾

朝野の梅八枝百朝つくくなり	門柳
法眼入来内次き近句あり	石斎
下谷でも十鼻うこのは出さる	鹿野
急なる中好意を思くすらふ	石斎
お雅白とと食仕立、貝をさる	文集
仕合を十娘ハ母おのふむり	文集
何い給の矣裕より速う言し	玉幸
ぬれし油路加まふの松う言	文集
白むくの裏うまされ、鶴の巻	三吏
小姑にせゆしく斤袖海まける	カテラ
白まをえれハ秋を交る鶴見	三吏
後家入ハ彼十月のえく、男	雅小
芳町く鹿こりお父子の何ん	文集
長まのこんごくをすおの傳	〃
お客とハ女の枕をよみなり	芥史
鶴まのつ中をまひるかこ	柳雨
お停響極治おく賣る屋は	玉幸
日本、まのハ橋の一里	橋
	海島

まをへひの付まゝに落ハ舞 鹿鈴  
十七八く名をイハるこ 文玉  
幕岸ウ河のくかハ枝ク解リ 柳有  
孝りハ田町次田町向の 橋有  
日女ハ麻ニ舞 並る麻ハ止 三吏  
坂ちよびこを月が 三吏  
毎南第の大將の名を残り 三吏  
指り子木の指川もこ 玉素  
大文字をまぐり 府の 川有

これ切の枝を果やう 府第 カテウ  
面白イ粘入之 牧く之令 柳有  
ちう王ハまゐんを深ハおむく 好キ 文集  
義のる之度めくハ 柳有  
ままはな中 藝子深 柳有  
甲不他をく 柳有  
筋星のあるま 柳有  
智りその昔の 柳有  
陰陽をかくハ 柳有

<p>         夜の薄イ奥又あぐまい海し          外：此山おつても百まら          片ら喜、矢よりとも、葉付る          四五男と海をて細のつらをは          葉うたこ奥伸く袖らくす          紅白の海を作るとりしは          三ちうが二つ掛たぐ青子ん          初渾の老美たはこり有責          松のまどくを那く重ん杖          使速速葉の口へもあうく          中ひそよハ星のハ中此イ斗り          南及ハ牛ハ及ハるを辨一          袖口へ好葉を依をちつは          十露道のお母、葉と細市川          海まれば念く青杖をい海          ませもせは仕もせは二人名をい          まをを将たあまぐ掃のやま          押をなぐちる、半のよのいあつこ       </p>	<p>         石斧          東里          玉子          玉子          文集          再文          柳与          玉子          三枝          東里          玉子          石斧          石斧          柳与          文集          “       </p>
--	--

裾の淋しいこゆめ共々さうゆた 石齋  
亮唯も大キナ本質泊りすち 三吏  
阿ら路日ハいざこぎゆえん都を 西幸  
強イ暑き付髪かぶりくささる 鹿を  
八毎の外ハ讀にひらひこそ  
廿房ハけんの人性も麻をおし 中幸  
新玉の門を出入おとしろは 首大  
天々地の間を九里余も電え 西夕  
白ぬを綴流しくる首をうへ 鹿鈴

摺り子木の梅川客を免す 玉章  
名の言イぢぢい立田の山を越し 三吏  
立ち付の葎大まきな羽着いさせ 美仁  
狗まきの桐油く房も以残る 梅山  
道無きゆら地まこ大赤巻 三鈴  
舟もようろふこさきくして夜ヲ飛 梅山  
神言をハゆり斗りのほもきん 有華  
長濤こころハ江にへり一向イ念 美仁  
目もえく晴り了秋をさひおし 再夕

十五枚の花立十四用迄ある  
 系化  
 不届と屏風を池のよへまき  
 文集  
 夏なまは見えなくこ下女をうま  
 産銘  
 ひくれ八重のふたき河る内家相  
 雨又  
 高士八おろり天直四子う知れ  
 梅水  
 常のま子をと相集いふれ  
 〃  
 けんあう成る大ねかきふれ  
 二宮入  
 修作縁のふる本ッ恒ちう人  
 有幸  
 堺海洲と初辰に庄なまあり  
 玉章

けく由しなとせましぬまのあかた  
 梅水  
 色紫へしう人を介くはをへ  
 与夕  
 ち中る居つちりなまう千手心  
 文集  
 けい陽のやうに板まうけい並  
 系化  
 粒まきみちくくねる娘のアな  
 玉章  
 知いハ玉冠紫出しびごもや  
 与夕  
 弁天こて神のまいかもむし  
 産銘  
 随一の客すい一のや希あり  
 与夕  
 松風をよまうくあせくわん中  
 産銘

傳正の後河くす木林たけ 三郎  
並の屏風ハ冷きもあつし 梅水  
宗任の生捕りハ美に認め 石斎  
人を兼こしを握束年より 再夕  
いとばさ射ふ月をのをさる世 梅水  
立よめとく又ゆは女客 カテウ  
再倉娘を志のりかあしけり 石斎  
をんれハテ坊ハうふね男取 三吏  
割着をけく世いと大笑イ 三郎

朝日の利益物達の客す居に 西素  
粧を日め希学菊へ手を合を 〃  
ささしの方かぶらもこのある三合あ 再夕  
樽井ハ織女と束と大一座 カテウ  
吉原の浪炮四季が又此 三郎  
坊の管の笑く美れ妙なり 梅水  
あかき世の道一ツをい江の所 再夕  
整なまてくまハ大キなこけ 石斎  
後ハ縁をえせぬのハさくや姫 再夕

中野とゆきか一お同立りたり  
 文集  
 ちる勢の江流がかりメ乾へ  
 カテ高  
 びうごぼるをひらる二十事  
 三郎  
 母のくを讀ぬハ不人相く様  
 梅水  
 学のちたんひ十つまを大つ  
 文集  
 こしまのそはくまなむか  
 梅水  
 本のうごくなよみか  
 カテ高  
 師見道跡をるるく  
 二  
 道の路ハカ袖下りり名く  
 五郎  
 孝けもにハ  
 母父  
 けりるいもま  
 四里  
 母父  
 大のなを角へ  
 後を  
 母父  
 議の事体ハ  
 女房  
 大のな  
 二  
 高の着園を  
 付て  
 母父  
 三  
 吉系も一度  
 けり  
 母父  
 二  
 神流く一  
 母  
 梅水  
 糸井戸のや  
 母父  
 二  
 何をけり  
 母父  
 二  
 文集



田ハ猶前細ハ物々各句ノニ更  
 耳ノ声目ニ舟斗リ並ニハキ  
 淺重トナリ米惣字の心録由  
 子ノ山遊者を一人持テ所  
 浮毎ノ舞々を焚キ連テ何  
 下ニミズノ端をおくキカクモ  
 じカトクハジツヘト果ルニ命め  
 終ニ其の聲をトセテ石松イ  
 常ノ翁を造リ志ニクモリ  
 色せんをたびニ階子たるはば  
 此のころききし梅の中へ下  
 寺ニテ一泊滝系井所ノ米  
 女手をおき居居所ノ米  
 おくはしとすましハ梅を  
 娘を結ぶたも法か入を今  
 肥後米の儀を今知リニ更  
 折ニおれ地下を今知リニ更  
 美日の端ニ結梅ノ米を今  
 更

中は毎夜此枕を以てあり 産乳  
 母もこんがもあのをとる言え 力なり  
 雨の音物場の事根の母は 雨夕  
 入王の位八かかひなり何なり 産乳  
 望人の見候あうよなり 産乳  
 産乳を枯れを器とて 産乳  
 平中あふ未記の水の塩とて 産乳  
 二年をわけてめつるゆやとて 文島  
 日を産てじは身を不共の海に 産乳  
 名候さあまのそとけへ程を産 産乳  
 梅つ母をある六月の四日と 雨夕  
 沖初入露のひつこく母あま 又集  
 神仏の糸と産乳のかけなり 産乳  
 一子不ハ梅の中不あり 雨夕  
 本尊殿斗り山吹に笑をばせ 雨夕  
 月こむる雲花候に顔仰へ 〃  
 阿いさあ福く志いと候を念 梅水  
 瓶大を一月と信ん張やとて 産乳

江戸風におんえんをとお汁を	美
をのまね袖ハゆき店下女を	〃
あ仙くもくも下細ヲ相撲こま	三丈
沖吉別敷くも林をばし上	綿子
おあ産何道田露ノ湯時と	石弁
大再故此松傍に極あま	再父
志げもさつ妻のうぐふたつ口	三丈
美の日ニ抜糸りも大年海	三粒
三つとまの思物えんみんやあ	鹿鈴
小桑の娘のあまをちつとん	三丈
羽子の子く娘存りまてん付れ	石弁
成留程ハ急んりよまじく	再父
初燈もさつねお世の娘りよ	〃
島子ハ牛娘ハ虎の旨し	不碎
せ碎のおを食せる料屋を	石弁
年房の次ニお都を又祀り	三丈
女房ニ七十五日加しうあま	鹿鈴
はほれさくもさつとんあれ	全

お先の藤原の毎にあらは	并大
二月と五月のやうな煙の浦	"
五束だしを吹何うも拾ひ	雨夕
祝のなま湯殿と南の松の因	不碎
あ光のいちご大なりを建	鹿鈴
流つたふとんぞとくおも塚を	"
ほころびて衣をはく海倉を	瑞雪
ちんちんのあまふは夏草あ	雨夕
いざいざぞ海も海もこへく	西幸
西幸	

  

西幸のあま枝折の梅を合	雨夕
たま海の雀を筑いせけんを	三更
毛せんのかへぬま豆の金も	鹿鈴
半日かたり余不好のやい海草	文集
當ころにしを長子かきい	鹿鈴
麦留うまひくをたがよ	雨夕
雪やある古海江の草は	三更
海あけらたのこもあ	"
あせらぬなをちり	雨夕

夏乃三が指折る昔川つら  
不のくの鏡うれい愁るり  
鴻赤を馬柳さる雲の山  
はく牙をえりり妻の者下り  
鳴物止しに母あはさる鳥子  
ゆきゆより海にさ鱈さる  
おとくくく五あくる中瀬  
伝言さるり色伴の所を植  
まぬかると蛇の目降るい茶も奥  
カテウ

芥子園画伝 楽海雨夕

てんねんころも慈悲河津山  
紫のゆりハるりの仙蓋るり  
く人者そ地なる有さるれ  
切りあぶかゆれと信西下知  
不そてまはるりも果毒か  
文珠より暑望をさるハ紫  
江戸深のを不可なりもの  
迷子の塚く名取らもそつ  
全

ノウシヤとハ如人志るる中 三吏  
田角ノ文字ノ申くよむ三釜山 不碎  
魚尾の馬子く妻平ノ思て海ハ 文集  
松と知集の志申をさう散り 有幸  
迹を去る海船是後口あり 川  
人丸を指対斗く妻くす 産船  
四打勇ハいそ花くし 岩梅  
入山ノ早下 代筆 三吏 不徒  
藏風里んくともかんはく 此四

産船の字を志るハ補をさま 洋種  
今ノのたつきいなりくを導く 兩彈  
志せハの例子甜通くぐ海り 力テウ  
海上く女蓋ハさりハをまし 有幸  
存むハ眼とがのそウ 西ラさは向ハ 衆ハ  
ぞんけんとも考むハなるん 文集  
糶進のさき船又たうれる 別井  
深氏ノ妻ハそ加ハ海ハ 産船  
笑ハをんすうハ 糶進 糶進 糶進

又相の以、鞠場ハ幸々たり 有幸  
等者亦先こころる者人ご客 名も  
何も此ひそくぐ干物をやく白ひ 喜々  
ふくごもさあどまひハ又幸々 作事  
まじしく海子鉄櫃ハたれこり、 玉事  
どごくもさあどまひハ又幸々 三交  
後このいこんびころのささく喜々 喜々  
時ハ今もこのいこんびころのささく喜々 喜々  
毛さくもさあどまひハ又幸々 喜々

櫻梅介を扱まき申り起し 派有  
會子亦れいやうなせまひ此後 英子  
重かきもさあどまひハ又幸々 門柳  
五こごもさあどまひハ又幸々 櫻梅  
細尼にお酒油の平たこ此後 文集  
上座にもさあどまひハ又幸々 蝶々  
二こごもさあどまひハ又幸々 汐風  
みくんの影表よけをまて苗を養 三交  
不し下女たなびく端をまて 英子

たゞいけつあると隣中及びける 門板  
弘法大師の由作なりかけ海三三史

因

和甫評

物志のうらなふ意のしじ緒十の雨夕  
釋尊ハ孫主なりてハ五百人 矢心  
御意甚の側ハ意のま白也  
■  
東の室こなきと女と鴻御利 蝶々  
大地へひびく指をた京の釋迦 葉子  
増上ち空に知れぬ者ぞり 丸粒

智悲院のや日蓮の堂と云く カゴ  
依用十様と云ふハ白の成り 丸粒  
おとまにゆりの葉毎お伝の 晋風  
唐て曇らハ者の山の身 一徳  
文彦のわいの風雅と云 樺の  
お巨ハ達ハの衣色を上げ 玉衣  
有がいの百首と云ふを付 仁心  
おどられと礼ハを伝ふも 矢心  
山号ハ長子と号ハ母をいれ 再々



ちが坂東西國を見へんれ 定橋  
室よりまはるもみのやまをわし 門柳  
をたしこころを何れを建屏風 文集  
海のこころを居た国がけの形に 門柳  
る大そよみ月ころしひるまきこも 此肉  
水車流の伝のハなれ 山 玉章  
下を岩井の子時を家のこころ 〃  
水あまこを森の男はしを無き 〃  
もちつと下うてなれたまをあま居 雨澤

妻もれや娘何れハ知れは道 家ハ  
二之帖源氏臣貴持く居る 三吏  
浪蕩りハ依せりを居くする 鹿野  
海上く知重斗り口をまき 有華  
あやをすれまきを成しこ海らえ 力三石  
なごう平志やくて仕島ハ我伴 偶中  
座ぬけの軍を志すハ柳を自 惲雅  
母の千声あり秋文の一はく 雨夕  
葉あはえく居る形のうけし 文集

鹿をたしと損を志す者ん  
お打身ハ心く物くつて四糸  
其糸梅ハ山形の河一下り  
向く歳くお葉ハ客をよび  
おんの鹿ハ素足根のうへくす  
あそまは志すまの華ハ竹ハ次  
ぞこぐさるハ北ハ其野ナ鼻よめ  
早の早ハ心然へぞらまける  
逢まを笑し浪を止して  
門柳  
西澤  
宮梅  
門柳  
鹿釣  
楓声  
三更  
文集  
三更  
文集  
門柳

四十七のハ魁ハ其者なり  
葉葉通ハ心移ハ志す本意ハ貞  
没者ハ七ハ四ハ其の社ハ三  
あふねハ依ハ非見葉ハ社ハカ  
ふんハ志す心然ハ其のまじりハ次  
ぢりハ心ぞくアハ其の海ハ破者  
手の四ハ心ハ志す斗ハ心ハ行  
舟ハ心ハ志す子ハ志すハ心ハ志  
物ハ心ハ志す鹿ハ志す鹿ハ志  
西澤  
宮梅  
門柳  
鹿釣  
楓声  
三更  
文集  
門柳

後のしんじつにさかきく海  
河舟へハ舟師丈ハ角と梅く  
ワカコシハ船師を乗ハナリ  
也髪ハ髪やがしを差く事  
生ケたごをおス入船にあらく  
所鑑尤もえへ不取者ナリ  
狭香を焚性ハ焚まづの  
その酒ラく加しを掛け  
梅むの眼とびつる酒ト  
鬼ハ

鞋道ものかきさハのめぬ  
小姑トモモ屋敷ハハ屋  
分仲ハ井村れをひつるし  
もてぬやのすのこま  
ワカコシハ船師を乗ハナリ  
川おいて小鑑たぐ古館細  
也頼をまけく淋しい有  
茶をえる酒ラくこめ  
中宿ハ内用者ハ新  
カテウ

へんせりやう、流くたををる 有幸  
 上流のよきをかましくまふ割 蝶々  
 時ハ今昔のよきをへ 英子  
 安上戸の概のらるをすけ 廣水  
 下彦愛をさ部ハゆり付く 再佳  
 かの心次を又河ののこふ人 柳声  
 名取冒と本よのあは浅さのい 全

催主

文集

○俳諧風書品月録 江都上野 花屋篤次郎

俳風柳橋拾遺十冊 川折点 柳橋代名 四季惠新の年録集巻五

同川傍柳 在川折点 柳橋代名 二巻

同折句程集冬運稿篇 江戸女文字抄句集巻七者 柳橋著

同筆 山支庵坐勢月と撰 柳橋著

俳諧 柳橋著 四季惠新の年録集巻五

